

“保養キャンペーン” この夏も！ ロシアの非汚染地域の“ノボ・キャンプ”へ クラスノポーリエの子ども達に参加

昨年に引き続き、今年も7月15日から3週間、クラスノポーリエの子ども達6名が、ロシアの非汚染地域にある「ノボ・キャンプ」に参加しています。「ノボ・キャンプ」は、ロシアの汚染地ブリャンスク州ノボツィブコフのNGO「ラドミチ」が主催するユニークなキャンプです。キャンプは、クラスノポーリエから東へ約80km離れたロシア領内の非汚染地域にあり、ドイツやイタリアなど



での保養に比べ、クラスノポーリエからも近く、子ども達の移動も容易です。「ラドミチ」の若いスタッフやボランティアがその運営を支えており、20日間の滞在期間中に、サークル活動、コンサートなど、様々な行事が行われ、いろんな地域から参加した年齢の異なる子ども達が交流し、一緒に新しいことを学び、協力し合いながら生活をできるよう工夫されています。

昨年初めて、私たちの「保養キャンペーン」の資金援助でクラスノポーリエから4人の子ども達をキャンプに送り出すことができました。昨年参加した子ども達は、キャンプをとっても気に入ったようで、最年長のカーチャは「ボランティアの人々の熱意と才能、自らの仕事への創造的なアプローチ、高い技能に感動しました。また、すばらしい思い出となった同世代の仲間との交流にも感謝

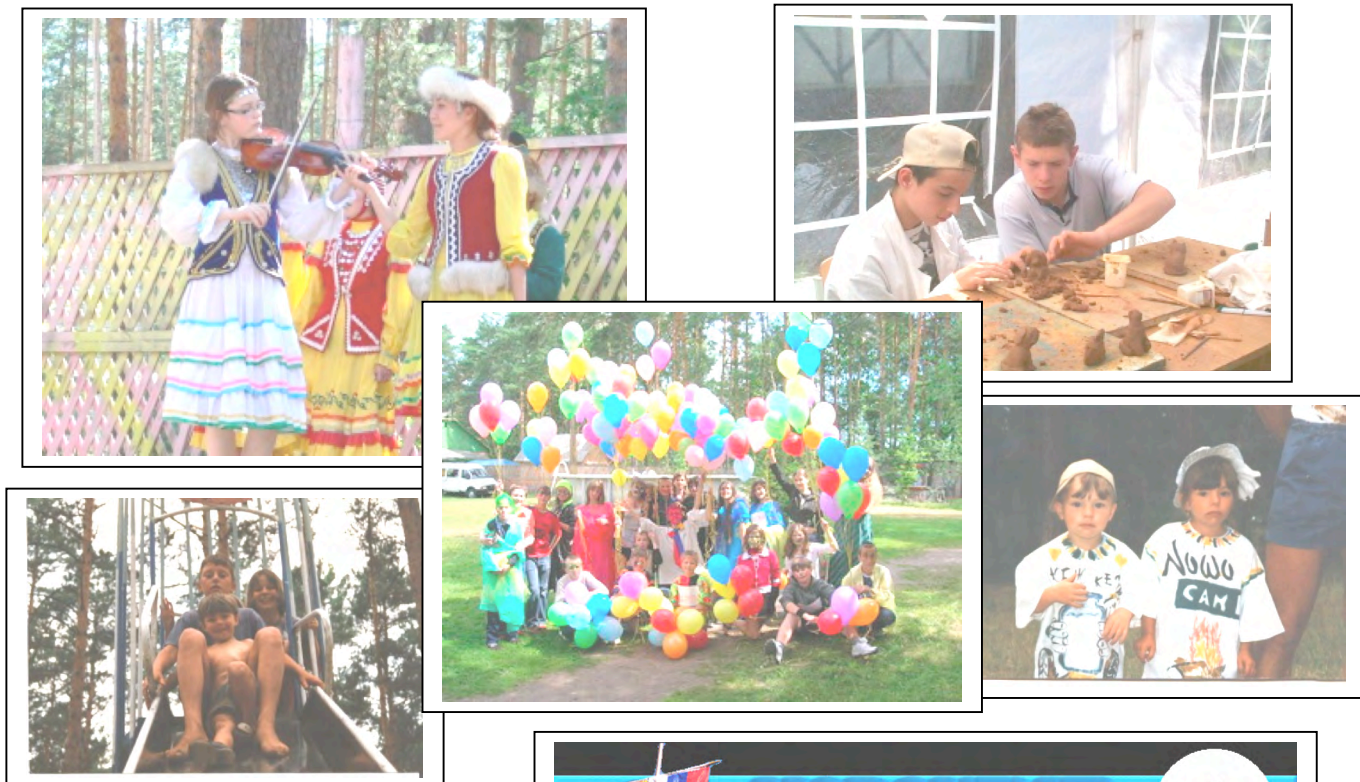
保養キャンペーン・カンパにご協力下さい！

しています。」と、支援してくれた日本の皆さんに御礼のメッセージを送ってくれました。大人達も「キャンプから戻ってきた子どもたちは、目の輝きが違っていましたよ。」と、驚いたようです。小児科医のベーラさんは、「ノボ・キャンプは子どもたちの成長にとって、とてもいい機会になるようです。皆さんの保養支援プロジェクトのおかげです。これからもぜひ、続け、多くの子どもたちにそのような体験をさせてあげたい。」と、話していました。私たちも、そのような体験を少しでも多くの子ども達にさせてあげたいと、今年も「保養キャンペーン」に取り組んでいます。

しかし残念ながら、7月現在でも、「保養キャンペーン」への資金の集まりが、まだまだ少なく、1人分（1人あたり450ドル）の資金しか集まっていません。昨年と同人数の4人の派遣には到底届かず、運営委員会で相談の上、「たとえ後払いでも、とにかく3人分はカンパを集めましょう」ということを目標にし、クラスノポリエのベーラさん（小児科医）に事情を連絡しました。ベーラさんの方では、少しでも多くの子ども達を参加させたいということで、親が半額を負担することになり、今年は6人の子どもたちが参加することになりました。引き続き、「保養カンパ」へのご協力をよろしくお願いします！

親が半額負担できる「余裕のある」家庭は、どうしても限られてしまいます（半額でも、教員の月給くらい）。子ども達の健康や精神的成長を促すことができ、現地の人々にも、これほど期待されている「ノボ・キャンプ」なのに…。今後は、より多くの子ども達、経済的に厳しい家庭の子ども達も、ぜひ参加できるよう、引き続き、私たちも頑張りたいと思いますので、ご協力をよろしくお願い致します。

（事務局／振津）



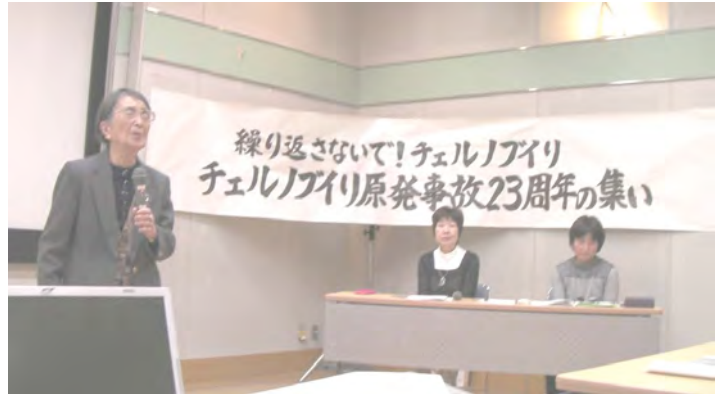
今年のノボ・キャンプの様子
ホームページより



チェルノブイリ原発事故 23 周年の集い

繰り返さないで！チェルノブイリ

4月26日(日)ドーンセンターで「チェルノブイリ原発事故23周年の集い」を持ちました。事故から23年。年月は流れ、あの頃産まれた子どもたちは大人になり、チェルノブイリのことを知らない人も多くなっています。しかし社会が忘れようとしても、現地の友人たちは今



も不安と痛みを抱えて生き続けています。これをどうリアルに捉え、訴えていったら良いのか？ ふりかえれば、原爆被爆者も、直後の地獄が過ぎた後、5年、10年、20年と、さまざまな健康や生活や心の苦しみに出会い、今なお重荷を背負い闘っています。これが、放射能の「ヒバク」のこわさなのだと、あらためて思い返しました。

今年は、「チェルノブイリ事故の放射線被曝の健康被害についての新しい報告」の紹介と「危険な日本の原発の状況」を報告してもらい(4頁、プログラム参照)、チェルノブイリが決して過去のものではないことを訴えました。続いて、山科さんのヒバクシャとしての体験を、直後から(チェルノブイリの今と同じ)23年目の頃のことを含めて話してもらい、重ね合わせるなかで、「ヒバクシャ」の先輩としてのチェルノブイリのヒバクシャへの想い・若い世代への想いを共に聞き、共に学びました。

今年、米寿を迎えられた山科さんは、もんぺ姿で登場。小柄で、色々な病気を抱えて、決して万全の体調ではないのに、当時の長崎の地図や「赤紙」など、次々と資料を示しながら、息つくひまもないほどに語ってくれました。直後のこと、父母妹弟を一度に無くし、遺骸と共に放射能の地面に何日も寝たこと、何も知らされない中で体を壊し生死の境をさまよったこと、周囲からの差別と無理解。孤独。仕事を失ったこと。病院で心ない言葉を掛けられ「生きていけない…」とさえ思ったこと。原水禁運動との出会い、外国のヒバクシャとの出会い。消えない健康不安。

山科さんのチェルノブイリのヒバクシャへのメッセージ、「ヒバクに負けないで、どうかどうか強く生きてほしい」。そして若い世代への訴え、「たとえ被爆者がいなくなっても日本が『被爆国』であることを決して忘れないで!」。これらの言葉を胸に、また新たにチェルノブイリ救援、ヒバクに苦しむ人のない世界をめざしたい。

来年は、「被爆65周年」。そして、再来年は「チェルノブイリ25周年」。「広島・長崎とチェルノブイリを結んで」、改めて「広島・長崎のヒバクシャのメッセージをどのように受け継いでゆくのか/チェルノブイリの今とこれからをどうとらえるか/日本の私たちの関わりは/私たち

の友人であるチェルノブイリのヒバクシャの人々と何を共有し、未来に向かって何ができるか…」、
いろんな機会に皆で語り合い、考え直し、これからの具体的な取組みに、現地の人々とともに取り
組んでゆけるような「2年間」にしたい。「23周年の集い」は、その新たなスタートになったの
ではないか。

(長澤由美)

《プログラム》

- ①報告1：事故23周年を迎えて
「チェルノブイリ事故処理作業従事者の新たなデータ」
救援関西事務局 振津かつみ
- ②報告2：日本でも繰り返さないでチェルノブイリ
「地震・老朽化：危険な日本の原発の閉鎖・廃炉を」
若狭連帯ネットワーク 久保良夫
- ③トーク：長崎被爆者・山科和子さんに聞く
「先輩ヒバクシャからチェルノブイリヒバクシャへの想い」
救援関西代表 山科和子、聞き手：寺岡文・濱塚哲朗



ベラルーシの子どもの作文を朗読する由美さん

山科さんとのトークに参加して

寺岡 文

2月のある日、携帯に1通のメールが届きました。長澤さんからです。4月の「23周年の集い」で山科さんから話を聴く役をやらせてもらえないかという内容でした。人前が苦手な私にはとてもムリ…。そして何より、この救援関西での私の活動といえば、イベントのときにちょこっと顔を出すくらい。山科さんのお話も集いのときにお聞きしただけだし、もっと適任者がいるはず・・・と思



っていたのですが、長くおつきあいされている他の方よりも、むしろ私のような者(?)の方が新鮮でいいのではないかと説得され、気がつけば役を引き受けていました。濱塚くんも一緒ですし、長澤さんも助け船を出してくれるということで・・・。

そして、山科さんにお会いして、打ち合わせをしたのが当日の約2週間前。振津さんと長澤さんとともに、お宅までおじゃまして、初めてじっくりとお話を伺いました。このときも熱心に色々とお話して下さって、数人でお聴きしてるのがもったいないくらいでした。

当日は時間がないのですべてはお話していただけないのですが、このときは、被爆当日のことから、医者からも人間として信じられないような暴言を吐かれたこと、旧ソ連を訪問したときのお話、アメリカで子どもたちに原爆の話がされたときのこと…そして現在の健康管理についてなど、様々なお話をお伺いしました。(それでももちろん、全部ではありません！)

それを、集会の中の短い時間で、どこまでお聴きできるか。時間は限られているので質問は絞らなければなりません。そこで、振津さんたちとも相談し、被爆当時のことは外せないとして、今回は、再来年のチェルノブイリ 25 周年、来年の長崎・広島被爆 65 周年に向け、「ヒバクシャの先輩」として、チェルノブイリの被災者へのメッセージをいただいて、そして今もって解決されていない、原発や核兵器、ウラン兵器等、私たちが引き継いでいかなければならない「今現在私たちの問題」として、「未来志向」の方向で語っていただくということになりました。

当日は、質問項目をメモしているものの、質問するだけで必死！で、上手く進行させる・・・というのは難しく、結局、山科さん自身のお話の力強さでトークは進みました。

チェルノブイリの被災者には「ヒバクに負けないで生き抜いて欲しい」、そして私たち世代には、「核や戦争がなくなるまで、被爆国ということを忘れないで引き継いでいってほしい・・・」という、山科さんからあふれ出る思いと言葉でトークは進みました。山科さんの力強いメッセージは、みなさんにも伝わったと思います。

核も戦争も急にはなくならないかもしれないけれど、メッセージをしっかりと受け止め、あきらめず、しつこく、伝えていかなければと、集会当日だけではなく、重要なのは、日々どう行動するかだと思いました。それを忘れないでおこうと思います。

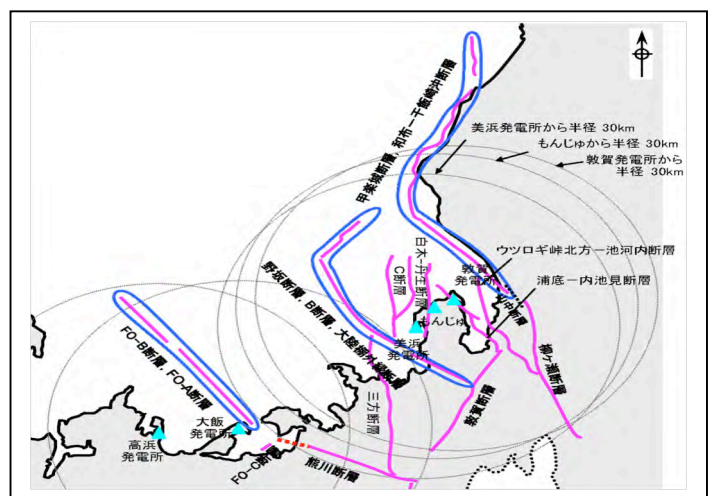
～「23周年の集い」での報告～

私たちは 美浜原発の廃炉を求めます

久保 良夫（若狭連帯行動ネットワーク）

関西電力は、これまで美浜原発の周辺にある活断層は、小さな地震しか起こさないと評価していましたが、今では、たくさんの活断層があることを認め、活断層が同時に動く地震についても評価しなければならぬこととなりました。

関電は、野坂断層- B断層- 大陸棚外縁断層の「同時活動」で、M7.7の大地震が美浜原発を襲うと評価しています。このような大きな地震が原発を襲えば、大災害になってしまうはずなのですが、なぜか、関電は断層モデルによる地震動の評価で、M7.3の程度として評価し直しています。こんな不可思議なことがまかり通るのでしょうか。



地震のエネルギー規模で1/4に過小評価しているのです。これで、関電は、安上がりの耐震「補強」工事で、美浜原発の60年運転を図ろうとしているのです。

★ 美浜原発は 大事故を起こし、老朽化しています

美浜1号は、燃料棒折損事故を起こしました。そして、1973年3月の定期検査で燃料棒をこっそり交換していたのを4年近く隠し続けたのです。また、原発の重要な機器である蒸気発生器細管でも大量の減肉・漏洩事故もおこしたのです。蒸気発生器細管の約2千本が減肉し、穴があいて冷却水漏えい事故を起こしました。4年半もの間、運転を停止していたのです。

美浜2号は、1991年2月9日、蒸気発生器細管ギロチン破断事故を起こしました。一歩間違えば炉心溶融事故にいたる危険性がありました。非常用炉心冷却装置(ECCS)が初めて作動しました。事故原因は、異常振動が発生し、破断したとされていますが、未だに未解明のままです。

美浜3号は 2004年8月9日、復水配管が破断し、下請作業員が高温蒸気と熱湯を浴び、5名が死亡、6名が重傷という復水配管破断・死傷事故を起こしました。原因は関電による減肉検査の手抜きだったのです。定検期間の短縮競争、作業のコストダウンと検査・補修の手抜きなど、安全性をないがしろにしていたことを明らかにしました。

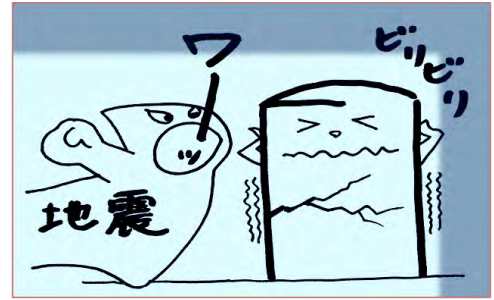
★ 原子炉容器は 中性子照射でもろくなる 放射能汚染が進み、ヒバクも深刻です

取り替えがきかない原子炉容器は、原発の心臓部にあたる重要な機器です。長年の運転によって、原子炉容器は、中性子照射され続け、非常にもろくなっています。新品の原子炉容器ではマイナス70～マイナス20℃の低温によって、やっともろくなる性質があるのですが、現在の美浜1・2号は約80℃、美浜3号でも30℃の熱によって、もろくなってしまいう性質に変わってきています。地震によって、緊急に炉心を冷やさないといけない事態になると、熱衝撃と地震力で原子炉容器が破壊される恐れがあるのです。

原発は、ヒバク労働なくしては運転できません。その大半は電力会社の正社員ではなく、「ヒバク要員」と呼ばれる下請作業員です。原爆ブラブラ病などの健康被害も極めて深刻です。ヒバク労働で病気になっても大半は補償されないまま放置されているのです。日本の原発被曝労働者の総ヒバク線量から推定しても、ガン・白血病死は300人にものぼるのですが、労災認定されたのは、白血病 5名、急性放射線症3名、多発性骨髄腫1名(長尾光明さん、04.1.13認定)、悪性リンパ腫1名(喜友名正(きゆな)さん、08.10.27認定) の計10名にすぎません。

★ 再生可能エネルギーへの転換を

美浜原発の廃炉を求め、脱原発から知恵を活かす社会への転換が求められています。電力消費量を削減。都市、交通体系の変革、ヒートアイランド現象の解消、家屋の断熱化、コジェネレーションの活用、太陽光発電や風力発電の積極的な推進、森林保全と間伐材によりバイオマス発電など、再生可能エネルギーなどへ大胆に転換すべき時代に突入しているのです。美浜原発の延命を許さず、廃炉に追い込む闘いが今こそ求められています。



2009年4月24日

関西電力株式会社社長 森 詳介 様

チェルノブイリ原発事故23年に際しての申し入れ

チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西

チェルノブイリ原発事故から間もなく23年を迎えます。たった1基の原発の事故によって、広島原爆の600倍（セシウム137で換算）とも推定される大量の放射能が放出され、欧州や日本を含む北半球全体に「死の灰」が降り注ぎました。原発周辺のウクライナ、ベラルーシ、ロシアの被災三国だけでも、少なくとも約800万人がヒバクシ、日本の面積の40%にも相当する広大な土地が「汚染地域」となりました。原発から30km圏内と高濃度汚染地域からは、40万人以上の人々が移住しました。移住の対象にならなかった汚染地域では、600万人を超える人々が、今も、体の内外から少しずつ被曝をしながら生活を続けています。

私たちが18年間にわたって支援を続けている、ベラルーシの汚染地域でも、自然とともに生きてきた人々の生活が、事故を境に一変してしまいました。広大な農地の汚染と、移住による人口減少のため、地域経済は不振に陥り、失業、貧困、アルコール依存などの社会問題も深刻化しています。小児甲状腺癌の増加をはじめ、住民の健康状態が全体として悪化しています。

「事故処理」のために、原発サイトや高汚染地で作業をし、被曝した、60万人にもものぼる若い兵士や労働者の健康被害も深刻です。事故処理作業の間で、白血病や悪性リンパ腫が、被曝線量に応じて有意に増加していることを示す、新たな報告もなされています。事故による放射能被害は、今後、さらに顕在化することが予想されます。

貴社は、このような「チェルノブイリ原発事故被害の教訓」を真摯に受け止め、危険な原発を即刻止めるべきです。特に、貴社の美浜原発の直下を地震が襲い、炉心溶融事故が起きれば、チェルノブイリのような重大な放射能災害に至る危険性があることを、私たちはとても心配しています。美浜原発は、運転30年を超えて老劣化が進み、しかも、すでに大事故を起こし、耐震安全性もありません。ベラルーシよりもはるかに人口密度の高い日本で、もしチェルノブイリのような事態になれば、その被害はさらに甚大です。

私たちは「チェルノブイリ原発事故23周年」に際し、以下を申し入れます。

- ①耐震性がなく、老朽化が進み、すでに重大な事故を起こしている美浜1・2号、及び3号を、即刻、閉鎖して下さい。
- ②プルサーマル計画を中止し、撤回して下さい。
- ③敦賀3・4号増設計画中止を日本原電に勧告して下さい。
- ④使用済み核燃料の中間貯蔵施設計画をやめて下さい。
- ⑤六ヶ所再処理工場の運転を中止するように日本原燃に申し入れて下さい。 以上

「申し入れ」に関する問合せ：〒663-8183 西宮市里中町2-1-24

振津かつみ／「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」事務局

「チェルノブイリとイラク・ヒバクをたどる写真展」 in 奈良

久保 きよ子

ある日突然、奈良脱原発ネットワークの堀田さんから電話があり、奈良で、写真展をするから「救援関西」から話をしにきてほしいとの要請がありました。「チェルノブイリのことなら〇〇さんに」と言うと、「もう ことわられました」との返事。朝10時までに奈良へつくのは到底無理。宝塚からは、遠いので、「そら、そうや」と、へんに納得をしてしまい、猪又さんと6月12日に行くことになりました。

会場は、奈良県女性センターで、広河隆一さんのチェルノブイリの写真と、森住卓さんのイラクでの「劣化ウラン兵器被害」の写真が展示されていました。会場には、背中に赤ちゃんを背負った若いお母さんも参加されており、20数年前の自分の姿が思い出されました。1986年4月30日から5月のチェルノブイリ原発事故を伝えた新聞や2002年にベラルーシを訪問し、体験してきたこと、今私たちが救援活動をしていることや、「日本の原発も止めていこう！」と訴えました。

私は、過去に 関電による紀伊半島原発基地構想に反対し、勝利したことや、信念を持って闘えば、明日は開けるという確信が持てたことを！そして、若狭の原発も止めていこう！と、皆さんに呼びかけました。

猪又さんは、救援のためのカンパの呼びかけをしました。皆さんのご協力で、マトリョーシカや絵はがきをたくさんを買って頂きました。

また、会場に集まってこられた皆さんの熱心なお話を聞くことができました。「オール電化に変えた友だちがいるが、どうしたらよいか？」の質問が出ました。実際、関電のCMでは、「CO2を出さない原発、もう オール電化ですね」と、宣伝をしています。関電は、なぜオール電化の宣伝をするのでしょうか？ それは、夜の電気が余っているからそれを消費させるための関電の大宣伝なのです。この夜の電気が余るのは、原発があるからです。原発は一日中運転をし、夜も発電をし続けるのです。これをうまく利用させようとするのが関電の商売、「オール電化」なのです。一見、便利で快適なように思われますが、地震などの自然災害が起こると、電気は止まってしまい、家庭生活はお手上げ状態になるという危うい生活の側面もあるのです。大阪ガスは、ガスで、発電する家庭でのコジェネレーション、また、燃料電池の家庭普及とか、原発に頼らない分散型発電の開発が着々と進みつつあります。発電中は、CO2を出さない原発は、地球温暖化問題を解決するかのよくな、国の宣伝に惑わされてはならないのです。

原発は、いったん事故が起これば、チェルノブイリ原発事故のように、多くの人々がヒバクさせられ、世界中や地域社会が壊滅することが起こるのです。また日常的に放射能を出し続け、ヒバク労働者なしには運転できない施設なのです。しかも、使い終わった核燃料や、廃炉となってしまった多くの施設は、放射線で汚染され、解体すらできないまま何十年も放置されるのです。人が近づ

けば、即死するぐらい危険な高レベルの放射性廃棄物を安全に処理する方法もないままなのです。
(深さ300メートルに埋める宣伝をしているが、受ける自治体はない。)

国の原発・核燃サイクル推進をかかげる間違っただ政策を改めなければなりません。共にがんばり
ましょう！



『相変わらず』を続けること

宝塚で男女共同参画センター・フェスティバルに便乗して行う恒例の“チェルノブイリ救援バザー”、今年はフリーマーケット中心の初夏のフェスティバルは中止しませんかとセンター事務局から打診があり、実現が危ぶまれました。

「男女共同参画センター」では年に2回フェスティバルを開催していますが、事務局は年に2回は多すぎる、フリマのようなダサいことは年1回にして、もっと「男女共同参画」にふさわしい企画にエネルギーを注ぎたいと思ってのことらしいです。流行の「民営化」でこのセンターもNPOが運営しているので、成果をあげる必要があるという事務局の事情も理解できます。

でも‘原発の危険性を考える宝塚の会(GENKIの会)’にとって“チェルノブイリ救援バザー”は活動の柱の1つだし、きっと他のグループもバザー収入をあてにしているはずなので、是非とも実施してほしいと発言すると、事務局は「それなら事務的な作業を利用グループ・ネットワークでやってほしい」ということになりました。

というので 言いだしっぺの私が担当者になることに・・・ やれやれ。

やりましたよ。出店グループの募集や、準備と当日の計画、それらの連絡などなど。時には困ったこともあって(例えば会場設営のとき、子育てグループの人たちがチビちゃん達を連れてきて、危なくてしかたないので、急遽プレイルームを開けたり)ヒヤヒヤものでしたが、ありがたいことに大きな失敗もなく終わることができました。

私たちのお店も商売繁盛で、ニュースを見てわざわざ買い物に来てくださる会員さんもあり、嬉しかったです。販売を担当した‘GENKIの会’スタッフもお客が途切れなかったのはよかったけれど、かなりくたびれたのでは・・・? お疲れさまでした。かく言う私も準備や片付けでリサイクル品の詰まったダンボール箱を持ち運びしている時は、うんとこどっこいしょでやれていたのですけど、さすがに次の日はどっと疲れが出ました。

“チェルノブイリ救援バザー”の収益は31,780円で、子ども元気キャンペーンにカンパしました。上関原発建設反対署名も余裕があれば(お客さんがワァ〜と集まったときは無理だった)呼びかけました。

チェルノブイリ事故被災者に関心を寄せてくれる人を増やしたいとの思いでバザーをやっていますが、スタッフの体力面でも、外的条件でもなかなかスムーズにはいかなくなってきました。

『相変わらず』を続けるのは結構大変です。しかしながら 今回もなんとかできたのだから、次もきっとやれるわと楽天的に考えよう。ベラルーシの方々を見習って、粘り強さとしんどい時のユ一モアが頼りです。

ささやかな救援活動ですが、できるだけ長く『相変わらず』やってますとみなさんに報告できま
すように。こういう場合の締めの文句は「継続は力なり」かな。

(そこそこ力持ちではあるけれど、暑さには弱い田中でした)

カンパ・会費の納入ありがとうございました！！

2009. 2.22~7.24

小村幸子 植田成人 畑野めぐみ 畑野寿子 真野京子 向井千晃 大月良子 山田耕作
京都原発研究会 岡村達郎 山崎知行 上岩出診療所 入江宥道 即得寺 岩崎幸二 岸上知三
田原良次 中川慶子 原発の危険性を考える宝塚の会 西尾漠 森本良子 中村良雄 林祐介
斉藤美智子 小谷勝彦 大田美智子 岡本牧子 太田垣みさ子 尾上照子 小林まゆみ 泉滋子
橋本真佐男 梅村信子 井上澄江 町田三美 吉崎恵美子 末田一秀 ストップ・ザ・もんじゅ
津村富代 高倉恭夫 染木富美代 戸川卓巳 田中章子 柴田征雄 田村和子 村田圭子
堀本フミ子 林律子 三田恵理子 松本郁夫 伊賀上菜穂 和田長久 川原重信 大久保利子
大西洋司 堀田美恵子 奈良脱原発ネットワーク 齋藤充子 門林洋子 前藤昭甫 杉村ルミ子
和田満穂 大和田美樹 藤田達 伊藤勝義 日野徹 梅原桂子 志賀直子 嶋田千恵子
明野昭美 岡田由江 相沢一正 堂元フク子 田島小幸 野口たい子 岩崎幸二 猪又雅子
久保きよ子 都藤清美 村上千佳子 佐藤ちい子 畑章夫 東野セツ 木村英子 田中章子
長澤由美 林みどり (順不同・敬称略／「23周年の集い」賛同カンパも含む)

♡♠♦♣9月現地訪問！救援カンパにご協力下さい！ ◆♣♡♠♦



9月中旬に、ベラルーシ被災地訪問を計画中です。今年、事務局の振津以外に、学生2人を含め、初めてのメンバー3人が、皆さんからの救援カンパやお手紙などを持って訪問します。ベ

ラルーシと日本の若者の交流が深まることを期待しています。例年より少し訪問時期が早いこともあり、まだまだ救援カンパが「例年並み」に達していません。カンパにご協力をよろしくお願い致します！

♡♠♦♣♡♠♦♣♡♠♦♣♡♠♦♣♡♠♦♣♡♠♦♣♡♠♦♣♡♠♦♣♡♠♦♣♡♠♦♣♡♠♦♣

ニュース発行：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局
〒546-0031 大阪市東住吉区田辺 1-9-12 山科方
「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」
郵便振替：00910-2-32752

